

2020 年 6 月 30 日

実践女子大学・実践女子大学短期大学部

教員研修 成果報告書（Web 公開用）

1. 所属	生活科学部 現代生活学科
2. 職名・氏名	講師 河井延晃
3. 研修期間	2019 年 4 月 1 日 ～ 2020 年 3 月 31 日
4. 研修先機関（国名）	東京大学 情報学環 情報経済研究室（日本）
5. 研修課題名	現代社会におけるネオサイバネティクスの批判的倫理構築 ：Society5.0 時代における社会問題とデザイン
6. 研修経過 （月単位で記載してください） 例）4 月上旬～5 月下旬：	4 月：受け入れ先準備、資料整理、雑誌原稿執筆掲載など 5 月～6 月：学会発表の準備と発表 上記とも並行して、 6 月～8 月：1920-1960 年代頃のサイバネティクスに関する資料収集、翻訳など 10 月～11 月：資料翻訳と論文用ノートの整理 12 月～1 月：国際学会への発表準備、投稿原稿の執筆など 2 月、3 月：コロナ禍のため、国内での学会発表、投稿等に切り替えて原稿執筆
7. 本研修で得られた成果等（論文・学会発表含む）	1. サイバネティクスからネオ・サイバネティクスの形成期における、文献翻訳・収集と資料整理。 2. Society5.0 時代における自動化技術や AI 活用における評価と提言など。 ・河井延晃 (2019.4) 「農業のセンスと Society5.0 のエッセンス 基礎情報学における「生命的組織」をふまえて」（『農業と経済 2019 年 4 月増刊号』昭和堂） ・河井延晃 (2019) 「ビーア（S. Beer）のサイバネティクス理論の現代的評価へむけて：初期思想におけるパース（C.S. Peirce）の意義を中心に」河井延晃（日本記号学会 2019 第 39 回全国大会（予稿集）） ※年度末予定の国際学会での発表などはコロナ禍で計画変更とし、新年度前期に国内学会で繰越発表と投稿を予定。

8. 所感	本研究活動は、昨今の日本での Society5.0（内閣府）やそれと呼応するコネクテッド・インダストリーズ（Connected Industries）の提唱される現代の情報化社会を背景にしつつも、やや大きな研究視座として通信・制御の技術史や思想史を統合したサイバネティクス史の解明から開始した。つまり、新たな情報化の段階において進行する自動化技術や制御理論の源流としてサイバネティクスを位置づけつつ、中長期的には現代の事例分析を試みようを開始したものであった。 このような研究活動と並行して、本年度は AI や IoT などの進展とともに、米国系 IT 企業（GAFAM）を超える勢いで中国系企業（BATH）なども影響力を増すなかで、各国の技術政策や国際政治も看過できない年であった。日本では、第五世代移動通信システム（5G）のサービス開始前夜であったが、年明け以降はコロナ禍とともにフェイクニュースや SNS での拡散によるインフォデミックといえる状況も見られた。コロナ禍対応としてのテレワークや行政の電子化を趨勢をみても、日本の IT 化や ICT の利活用能力自体が極端に弱いことが露呈した。 かつてのオフィスのオートメーションや旧時代の人工知能ブームにおいて、むしろシャドウワーク（この場合電子化に伴う手作業やアナログ業務）の増大例のような逆説的状況は回避すべく制度設計する必要がある。このような ICT の利活用の弱さは教育においても看過できない状況であり、初等中等教育から高等教育に至るまで様々な ICT 活用上の課題が提起されたといえる。 これらの様々な社会課題の現出をむしろ契機として、今後想定される激甚災害や労働者人口の減少なども想定するなら、現状を批判的にとらえつつも課題解決のために IT や ICT をもっと迅速かつ公正に導入する視座が求められるであろう。 いずれにせよ、「アフターコロナ」という概念を無視して研究を構想することが困難な「諸社会分断」の一年となったように思われる。このような世界の「分断」をつなぎ、社会問題を IT によって解決するためにもサイバネティクス概念を批判的に再検討する意義は高まっている。
-------	---